

南太平洋に桜散る―

幻の叔父・山岸昌司を追って

乙飛六期 故 山岸昌司 様

姪 平林 峰子

昭和十七年十月二十六日、私の母の弟・山岸昌司は南太平洋海戦で、航空母艦「翔鶴」の搭乗員で、第一中隊二番搭乗員として出撃し、米軍の航空母艦「ホーネット」に体当たりし自爆、戦死しました。二十二才でした。



この海戦の出撃前に書いたと思われる遺書がありました。「つくづく、男と生れ太平洋の大戦場で戦える喜びを感じております。」と、

二度と還ることのない故郷への最後の手紙でした。

五年前、私の住む大町市で戦時中の兵事資料が発見され、それを元に、一昨年「焼却されるべきだった兵事資料が語る戦争の真実 大本営最後の指令」と言う映画が製作され上映されました。縁あって私も出演させて頂くことになり、撮影の現場で二百冊を超える兵事資料を目の前にして、背筋が凍るとはこのようなことをいうのかと、驚きで言葉も出ませんでした。

今まで事あるごとにお墓参りに行き、叔父の墓に手を合わせていたのですが、命日が十月二十六日とは気にも留めていませんでした。

映画を観てからは、叔父の最期が気に掛かりだし、アルバムを整理していると、パラパラとセピア色になった信濃毎日新聞の切り抜きがでてきました。そこには、叔父は昭和十四年、筑波海軍航空隊で教官時代、茨城県友部の永井一郎衛門さん宅に下宿していたこと、その永井さん宅では叔父と年齢も気立てもよく似た一粒種（十二才）を亡くされたばかりであったこと、そんな不思議な巡あわせで、永井さん御一家との縁は日に日に深く結ばれていったのですが、

あつぱれ、若鷹は大陸で羽ばたき、さらに南海にて壮烈な戦死を遂げたのです。永井さんは、叔父の故郷、大町の社村を訪ね、「この村から山岸飛曹長に続く飛行兵を」と、グライダー一機を寄贈された。―と記載されていました。

これは、母が私達に遺してくれた無言のメッセージだと思いました。以来、亡き叔父探しの旅が始まったのです。

叔父が下宿していた友部の電話帳を取り寄せ聞いたところ驚きました。「永井一郎衛門」という名前が載っていたからです。まさか、七十年前の名前があるなんて信じられませんでした。同姓同名の方も知れませんが、いきなり電話しても相手に迷惑をかけるのではと思ひ、掛けられませんでした。

いろいろ調べていくうちに、毎年「予科練慰霊祭」が土浦で行われていると知り、平成二十、出席することにしました。その時、しばらく忘れていた友部のことが頭に浮かび、この際思い切って永井さん宅に伺ってみようと、お訪ねしました。

そこで、最初に出てこられた男性が「私が永井一郎衛門です」と言われ、一瞬驚いていると、次に現れた女性が「娘の博子です。父は先代か

ら襲名して永井一郎衛門を継いでおります。」
と言われ、離れから、私の叔父の物だと、古びた日記帳と竹製の弓、それと双眼鏡を持ってこられ、「これは先代からの遺言で大事に守ってくださいました。八月十五日には出して、家の仏壇に、供えてきました。」と言われたのです。早速日記帳を開いてみると、そこには兵事資料に書かれていたと同じ文字があり、叔父の筆跡でした。七十年もの間、大切に守って下さった永井さんに感謝の気持ちで涙が止まらず、永井さんと叔父は、今まで深い絆で結ばれていたんだなあと思いました。そして博子さんは「どうぞ持って帰って上げてください」と言われましたが、私は翌日慰霊祭に出席するので日記と双眼鏡だけ頂いて帰ることにし、弓は送って頂くようお願いしてお別れしました。



翌二十七日は初めての慰霊祭に出席し、二人像の前で厳かに行われた式典の中で、身の引き締まる思いで献花をいたしました。式典後の懇親会会

場で、もしかしての思いから、叔父の所属した予科練六期生の方はいらっしやらないかと探したのですが見当たりませんでした。思い切つて受付の方にお聞きすると「昔のことが分かる人はあの人」と案内された方は、十八期の堺岡一様でした。「六期生のこととは分からないが、私は七期の西澤廣義先輩から教わった」と言われました。

西澤さんについては、出発前に映画関係者から「予科練記念館には西澤さんの写真が飾ってあった」と、資料が送られて来ていたので、どんな方かと気になっていたので。叔父と同じ長野県出身者で、亡くなられたのは昭和十九年十月二十六日、叔父と祥月命日が同じと知り、いつかお墓参りに行こうと思っていたので、そのお名前が出て驚きました。

土浦から帰った二日後に、永井さんから弓が送られてきました。「本当に、本当にビックリする現実に出会い、まだ興奮が覚めない感じですよ。お会いできたこと、今まで大切に守ってきた物があるべき処へたどり着いたこと、大変嬉しく思います。」と手紙が添えられてありました。私は、早速、日記帳と双眼鏡、そしていつもよりたくさんのお供え物を用意し、報告のためにお墓に行き「永井さんの家に行ってきたよ。

叔父さんの大事な物ももらって来たからね」と、日記帳を開いて見せてあげました。叔父は何と申ったでしょうか？「今頃どうした！」と言っていたかもしれません。

それからは、まだ日本の何処かに六期生で生存されておられる方がいるはずと思い、予科練雄飛会本部に問い合わせたところ、三重県支部長の岩城様と、六期生の澤田様、横浜の大谷様の住所が書かれた葉書が届きました。早速岩城様にお手紙を出したところ、「澤田様は今年の暑さで体調を壊し入院されています。」とのことと「お元気なられたらお会いしたい」とお願いしました。大谷様は、「ご家族の方から連絡があり「二十三年に他界しました」とのことでした。そして、叔父の命日が来る前にもう一度友部に行つて永井さんのお墓参りをと決心し、十月中旬に出掛けました。永井さんの二階に泊めて頂き驚きました。叔父が使っていたという飾り棚がその部屋にあったのです。このような物まで大切に保管されていたなんて・・・、永井さんのお心に、熱いものがこみ上げてきました。

次の日、永井家の墓所に案内され、墓前に手を合わせ、今までの感謝の気持ちを伝えました。その後、博子さんの案内で、筑波航空隊司令部

と司令台を見学させていただき帰路につきました。そして十月二十六日、叔父の七十回目の命日、私はお墓に行き「永井さんに会ってきましたよ。お墓参りしてきましたよ。」と報告しました。永井さんが亡くなって、今年の九月二日が五十年目になるといって、何とも不思議な縁を感じ、一度切れた運命の赤い糸はこうして七十年の時を超えてまた一本に結ばれた。とそんな気持ちになりました。

翌二十七日、気になっていた小川村の西澤廣義さんのお宅を訪ね、お墓参りをさせて頂きました。西澤さんは、つづら折りの坂道を登った高台で北アルプスが一望に見渡せるとても綺麗な所で眠っていらっしやいました。

そして、秋の終わりに悲しい知らせが届きました。三重の岩城様からで、澤田様の訃報でした。続いて翌二月に入って、思いがけず澤田様の息子さんからお手紙を頂き、「父の遺品を整理していたら六期生が平成二十一年に作成した名簿があったからお送りします。」と、十二名のお名前と住所が書かれたものでした。私は急いで叔父の資料を入れた手紙を出したところ、戻ってきた手紙もありましたが、二名の方の息子さんからお電話を頂き、一人の方からは「二十三年に亡くなりました。」と言われ、

もう一人の方は「現在入院しています」とのご連絡でした。

新潟の外山様も入院されており、息子さんが私からの手紙を読んで聞かせたら、現在の自分のことは分からないが「山岸は操縦員で、航空母艦「翔鶴」に配属になった。自分は偵察員で航空母艦「赤城」に配属になった」と言われたそうです。「自分も今まで父の青春時代、戦争中の十年について、まともに話を聞いてこなかったことを今更ながら残念に思います」とのお手紙を頂きました。また、福岡の納富様からは「平林さんの手紙が届いた二日後に亡くなりました。せめて一年早く分かっていたら話も聞けたのに残念です」と、奥様よりお手紙を頂きました。

そして、三月一日私が探し続けていた方のお手紙が届いたので。それは長野県佐久市にお住いの塚本正一様からで、まさか！と信じられませんでした。手紙には、「入隊当時から山岸兄とは同班で、二十四時間寝食を共にした中で、山岸兄は存在感があつていつも落ち着いて兄貴の感があり、彼が在学中に叱られたことは一度もありませんでした。卒業と同時に全国の航空隊や連合艦隊、それに支那方面へと散りじりに配属になっ

たため、誰が何処にいるのか知りようもありませんでした。今度会う時は、靖国神社の桜の下だと皆が思っており、そのつもりで飛行機にのっていました。人生二十五年が同期の合言葉でした。戦後もしばらくは混乱が続き、お互いの探しあいもできませんでした。生き残った者の消息が分かって来たのは、やはり靖国神社での慰霊祭でしたが、戦死者については一切わかりませんでした。」とあり、私の送った資料を見て「初めてその後の消息と戦死した場所を知り、思わず万感胸に迫りました」と綴られています。この手紙を読みながら、塚本様と叔父の姿が重なり合つて、一度に読むことはできませんでした。奇跡としか言いようのない、でも真実で、本当にこんなことがあるんですね。そして、私は是非お会いしたいとお願ひしたのですが、「高齢と体調が良くなく、人のお世話になつてるのでどうかご容赦ください。」とのことで、残念ながらお会いすることはできませんでしたが、二枚だけあつたからと、昭和十年六月一日予科練入隊時と、卒後の時の写真が、送られてきました。入隊時の少年兵たちの姿と、凜々しくなった少しあどけなきの残る中にも日本男子としての毅然とした姿があり、初めて見た十五才の叔父の姿、そして何通かのお手紙の中

で叔父の予科練の三年間のことをわずかながら知ることができ、感謝の気持ちでいっぱいになりました。塚本様どうか叔父の分までいつまでもお元気でいて下さることを祈っております。

茨城県友部にある航空司令部の建物と司令台はそのまま遺され昨年十二月二十日「筑波航空隊記念館」として一般公開されました。叔父の遺品はそちらに展示されております。

母は「叔父さんは戦死したんだよ」としか話してくれないまま、四十五年前に他界しましたが、本当に魂は眠っているんだと思います。そして叔父が私に伝えたかったこととは、永井さんを訪ねることだったのかと。

戦死した叔父と私は、今不思議な出会いをしています。幾つかの偶然と奇跡が重なって思いもつかぬ方向へタイムスリップしているのです。

そして、戦後はまだ続いていることを、実感しております。